

第 38 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2008 年 11 月 1 日～3 日（和歌山大学）
セッション討議内容の記録

セッション名：環境問題（1）	
日付：11月 1 日（土）曜日、セッション時間： 9：00～10：30	
司会者名（所属）： 並河良治（国土技術政策総合研究所）	
討 議 内 容	<p>セッション全体：セッションの進め方は、各論文発表の後、5分程度の質疑応答を行い、残りの時間を全体を通じた討議とした。本セッションは、環境問題という共通点はあるものの、途上国の飲み水の改善に関するもの、代替燃料としてのバイオ燃料の普及における経済的な分析、高濃度原子力廃棄物処理場の立地に関するものと幅広く相互に関連する部分が少なかったため、全体討議により議論の活性化に貢献するまでには至らなかった。</p> <p>全体の討議としては、テーマ設定の前提、研究の目指すところなどの観点から討議が行われた。初日の第1セッションで参加者が少なく（10名程度）、活気のある状況とはいえなかったが、発表に対する討議は、参加者の積極的な発言により、さまざま観点から深められた。</p> <p>具体的な内容は、以下のとおり。</p>
	<p>（発表番号）発表者名（所属）：（58）柴田翔（京都大学大学院）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安全な飲料水を確保する代替技術として、国の方針 水道システムを目指すですがすぐには無理 ・代替技術はメンテ可能なものということだが、提供する技術は経済活動のレベルを上げ、それでメンテができるようにするという考えも必要。 まず、健康の維持を考慮が先決という状況。 ・代替技術の検討においては、私権を設定している井戸を共有するという意識の有無がかぎとなるのではないか。
	<p>（発表番号）発表者名（所属）：（59）紀伊雅敦（地球環境産業技術研究機構）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バイオ燃料の価格は、食料生産との代替については、サトウキビと燃料だけでなく、サトウキビと他の作物との代替も考慮しなければならないのではないか。 現在検討中 ・バイオ燃料の使用が CO2 削減となるには、作付け面積の純増という条件が必要ではないか。また、日本の現状を考えると、休耕地の活用は考えられないか。ゴミの活用は考えられないか。日本で行うとコストが高すぎる。ゴミもコストがかかる。 ・バイオ燃料は、CO2 削減にはなっても GHG の削減にならないという指摘もある。この研究の目指すものは何か。 GHG 削減に寄与するかどうかを量的に確認することである。
	<p>（発表番号）発表者名（所属）：（60）上村祥代（福井大学大学院）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この研究の今後の展開の方向性はどんなものか。 どのように具体策を提供すべきか、また、自治体が HLW 処分場の検討をしやすいようにするにはどのようにすべきかを明らかにしたい。 ・HLW 処分場の必要性、緊急性があるのか。 2040年でも六ヶ所村で足りる。 ・HLW 処分場の立地を議論する際、原発の必要性の確認が前提ではないか。 ・HLW 処分場の必要性を認めつつ、立地拒否の条例を制定するのは、無責任である。 ・HLW 処分場の検討を短期間で切り上げて受け入れ拒否となるのは、処分場立地の損益が明らかに損だとわかるからではないか。 風評被害の大きさなどを今後明らかにしたい。